

# 本研究の目的と経緯

若林邦彦

## 1. 研究の目的

本研究事業は、科学研究費「木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究」[基盤研究C]の補助を受けて行うとともに、同志社大学歴史資料館第4期南山城総合学術調査「木津川・淀川水系の弥生～古墳時代に関する研究」(2012～2016年度)の一環としても行った。

木津川・淀川流域は古墳時代の地域首長の盟主古墳の移動・消長のモデル地域として注目を浴びてきた。しかし、そういった古墳・古墳群の消長とその造墓集団と考えられる集落遺跡の動態との関係は、ほとんど論じられていない。また、その前代の弥生時代については集落遺跡の消長などが論じられているものの、弥生時代の墳墓の消長と古墳時代への連続性については議論が少ない。そこで、墳墓・集落遺跡の双方を集成・分析することにより、木津川・淀川流域の考古学的動態を考察する。それにより、6世紀以前の淀川・木津川流域の特質を論じ、それを通して日本古代国家形成期の重要なモデルとして提示したい。

木津川・淀川流域地域は、椿井大塚山古墳・平尾城山古墳・久津川車塚古墳・元稻荷古墳・鍋塚古墳・弁天山古墳などを題材に、古墳時代の地域首長の盟主古墳の移動・消長のモデル地域として注目を浴びてきた。例えば、都出比呂志(都出1989)は、木津川流域では古墳時代前～中期に椿井大塚山古墳の周辺から久津川古墳群へ、桂川右岸域では向日丘陵にかかる領域から長岡グループへ、淀川左岸では交野台地・丘陵の森古墳群から淀川に近い牧野車塚古墳へと領域の首長墓が移動していることを指摘した。また、和田晴吾(和田1998)は、木津川流域を素材に、全長100mを超える大規模古墳だけでなく、中規模古墳も含めた動態を詳細に論じながら前期・中期の中にもさらにこまかな時期差によって相対的に規模の大きな古墳を造る領域が、細かく移動し続けていることが指摘している。ただ、近年、下垣仁志(下垣2012)は、領域の中の古墳分布の動態だけでは「首長系譜」を描くことは難しいとして、領域内での銅鏡の保有状況を分析して、領域内の有力集団の存在を読み取る方法を提示している。

すこしずつ論点は異なるものの、いずれの論者も各古墳群はその形成領域の近辺(数km～10km範囲)を造墓の主体集団と考え、古墳の規模・副葬品の内容から、そういった小地域間の優劣関係を論じてその小地域間関係の変化を首長系譜とその動態の反映とみている。また、奈良盆地では、坂靖(坂2008)が、古墳群と領域に形成される集落群との関係から古代氏族とその領域形成について論じている。

しかし、そういった古墳・古墳群の消長とその造墓集団と考えられる集落遺跡の動態との関係が詳細に論じられる例は、ほとんどない。奈良盆地の例も古墳と領域の関係がア prioriに前提とされたうえで議論が進行している。実際に、木津川流域では古墳時代中期に大規模古墳が形成される久津川

古墳群近辺で、有力な集落などが形成される調査データは認めにくいようである。現在では調査データの集成・比較自体が行われておらず、この問題はデータ収集と客観的な比較方法の確立を経なければ論じられない。

ただ、近年では、淀川左岸の交野台地近辺で森古墳群・車塚古墳群などの周辺に古墳時代中～後期の集落動態もわかる発掘調査例が蓄積され、集落の増加や開発の動向と形成される古墳群の消長の関係が類推できる例がみられる。こういった例を参照しながら、調査データ蓄積の少ない地域についても集落動態と古墳群形成の相関について類推を進めることができると考える。

一方で、その前代の弥生時代については当地域においては集落遺跡の消長などが論じられている。伊藤淳史（伊藤 2005）は、京都盆地～木津川流域の弥生～古墳時代初頭集落動態を膨大なデータ集成を通じて分析し、継続的に遺跡形成がみられる領域とそうでない領域があること、古墳前期の大規模古墳はむしろ後者の地域にみられ、大規模古墳が有力集落形成領域と相関しない可能性を指摘している。有力古墳の形成に関する重要な指摘と言えよう。また、筆者（若林 2009）も同地域の淀川流域・木津川流域の弥生集落動態を論じる中で、淀川右岸・桂川流域・巨椋池周辺には複合型集落が分布するものの、淀川左岸と木津川流域にはそういった地域の核となる弥生集落の形成がみられないことを指摘した。

この点については、近年、近畿地方の弥生時代方形周溝墓制の性格をめぐって藤井整（藤井 2009）が精力的に研究を行っており、墳丘規模と埋葬主体のありかたから方形周溝墓の階層化の深度を類推する研究がおこなわれている。この視点を導入すれば、木津川・淀川流域の弥生～古墳時代初頭墳墓の階層化の小地域性を描きだすこともできよう。

後者の地域には、より古相の前期古墳が存在することから、古墳の成立しはじめる小地域で際立った人口増や集落間の階層化が確認されてこなかったことは注目される。さらに、この問題を論じるためには、弥生時代において木津川・淀川流域の墓制にどのような階層関係が認められるのかを、伊藤・筆者の集落分析と重ねて評価しておく必要がある。

このように、弥生～古墳時代を通じて連続的に集落・墳墓の動態を把握し比較する研究はあまり盛んではなかった。弥生時代・古墳時代についてそれぞれ別に研究・分析していたというのが実情であろう。ただ、近年古代学研究会において『集落動態から見た弥生時代～古墳時代の社会変化』（古代学研究会編 2016）が刊行され、弥生時代後半期から古墳時代への連続的集落動態変化の把握へのアプローチは行われてきている。本研究は、それを木津川・淀川流域にフォーカスして行い、詳細な分析を志すものである。

## 2. 研究事業の体制と経緯

これらの問題意識に基づき、木津川・淀川流域に限定して弥生時代～古墳時代の集落動態と造墓活動を通時的に分析することにより、方形周溝墓制からは初期農耕社会の集団関係、さらに古墳の消長からは首長系譜論を冷静に分析することをめざした。2013～2015年度を中心に、当該地域の弥生時代～古墳時代の通時的集落遺跡形成の実態をデータ集成する。これにより、各小地域の遺跡数・居住

集団数の増減を把握する。可能な場合は、鉄生産などにかかわる手工業生産集落の有無も検討した。

同時に、弥生墳墓の階層化傾向の小地域性の分析とともに古墳群形成の変遷を再整理しようと考えた。弥生墳墓の階層化傾向の小地域性は、方形周溝墓群内の各墳墓の規模・形態と埋葬のありかたの相関を分析した。また、古墳群の変遷については、最新の調査データや副葬品の編年観の変化に照らして、従前の古墳群変遷を整理した。

上記の分析は、主に下記の連携研究者・研究協力者ともに行い、個々の分析は本書に掲載した。それらを取りまとめた視点の論考を、若林が記述した。

・研究代表者

若林邦彦〔同志社大学歴史資料館〕

・連携研究者

伊藤淳史〔京都大学文化財総合研究センター〕

・研究協力者

藤井整〔京都府教育委員会文化財保護課〕

古川匠〔京都府教育委員会文化財保護課〕

宇野隆志〔橿原考古学研究所（2013～2014年度は京都市文化財保護課所属）〕

濱田延充〔寝屋川市教育委員会文化スポーツ課〕

真鍋成史〔交野市教育委員会社会教育課〕

吉田知史〔交野市教育委員会社会教育課〕

・なお、2012～2016年度には、手島美香〔同志社大学歴史資料館契約職員〕による研究事務の補助をうけた。

また、上記のメンバーが集まり、合計12回の研究会を行い、研究の進捗状況を確認し、議論を行った。その内容は以下の通りである。

第1回

日時：2012年8月12日 同志社大学今出川校地発掘調査事務所 10：00-12：00

内容：共同研究の趣旨についての説明と討論

第2回

日時：2012年 11月18日日曜日13：30-16：00

場所：同志社大学歴史資料館収蔵庫

研究発表：伊藤淳史「京都盆地・木津川流域の弥生集落」・古川匠「桂川流域の古墳時代集落」

第3回

日時：2013年3月16日土曜日14：30-16：30

場所：同志社大学歴史資料館収蔵庫

研究発表：真鍋成史「淀川左岸流域の古墳と集落」・若林邦彦「淀川右岸流域の古墳時代集落」

第4回

日時：2013年6月15日土曜日13：30-16：00

場所：同志社大学歴史資料館収蔵庫

研究発表：藤井 整「山城地域における弥生墳墓の動向」・宇野隆志「山城地域における古墳分布と築造動向について」

第5回

日時：2013年10月12日土曜日14：00-16：30

場所：同志社大学今出川校地発掘調査事務所

研究発表：濱田延充「淀川水系の弥生遺跡動態」

第6回

日時：2014年3月15日土曜日14：00-16：00

場所：同志社大学歴史資料館

研究発表：若林邦彦「データベースと淀川両岸の集落文分布変遷」

第7回

日時：2014年6月14日土曜日14：00-16：00

場所：同志社大学歴史資料館

研究発表：古川匠「桂川右岸の古墳集落動態」

第8回

日時：2014年9月20日土曜日 14：00-16：00

場所：同志社大学歴史資料館（京田辺校地）

研究発表：吉田知史「交野の古墳時代集落動態と古墳動態の関係」

第9回

日時：2014年12月27日土曜日 14：00-16：00

場所：同志社大学歴史資料館（京田辺校地）

研究発表：真鍋成史「淀川流域の鍛冶関連遺跡の動態」・濱田延充「河内湖北岸の古墳集落動態」

第10回

日時：2015年3月15日土曜日 14：00-16：00

場所：同志社大学歴史資料館（京田辺校地）

研究発表：藤井整「近畿地方における造墓集団と社会」

第11回

日時：2016年4月23日（土）14：00-17：00

場所：同志社大学歴史資料館

研究発表： 若林邦彦「弥生～古墳時代集落動態の傾向」・伊藤淳史「京都盆地の弥生集落動態」・宇野隆志「京都盆地の古墳動態」

第12回

日時：2016年5月14日（土）10：00-12：00

場所：同志社大学歴史資料館

研究発表：藤井整「弥生墓制からみた木塚川・淀川水系の社会」・吉田知史「交野の古墳時代集落動態と古墳動態」

関連文献

伊藤淳史 2005「国家形成前夜の遺跡動態—京都府南部（山城）地域の事例から」『国家形成の比較研究』学生社

下垣仁志 2012「古墳時代首長墓系譜論の系譜」『考古学研究』第59巻第2号

都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店

坂 靖 2008『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化』雄山閣

藤井整 2009「近畿地方弥生時代の親族集団と社会構造」『考古学研究』第53巻第3号

若林邦彦 2009「集落分布パターンの変遷からみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149号

和田晴吾 1998「古墳時代は国家段階か」『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館

古代学研究会編 2016『集落動態から見た弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房